

教職員の協働意識を高める校内研修の充実

—— 生徒とのより良い関わりを支援する

「サポートブック」の作成と活用を通して ——

長期研修員 大塚 純子

《研究の概要》

本研究は、生徒指導・教育相談における教職員の資質の向上と、組織で協働して生徒指導・教育相談に取り組んでいこうとする意識を高めることを目的とした。はじめに、総合教育センター基幹研修等該当者を対象に、若手教員の生徒指導を進める上での課題と中堅教員の生徒指導を進める上での工夫を把握するための実態調査を行った。次に、その調査結果を生かして、組織で協働する意識を高めることを目指した「校内研修プログラム」と、生徒とのより良い関わりを支援する「サポートブック」を作成した。「サポートブック」を補助資料として用いた「校内研修プログラム」の実施や、教職員への指導・助言場面において「サポートブック」を活用することにより、教職員の生徒指導・教育相談の課題に、組織で協働して取り組む意識が高まることを実践を通して明らかにした。

キーワード 【生徒指導 教職員 校内研修 協働意識 より良い関わり】

群馬県総合教育センター

分類記号：F08-01 平成29年度 263集

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領総則（平成20年3月公示）では、「教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てるとともに生徒理解を深め、生徒が自主的に判断、行動し積極的に自己を生かしていくことができるよう、生徒指導の充実を図ること」が大切であると述べられている。中央教育審議会（答申）（平成17年10月）の「新しい時代の義務教育を創造する」では、「教師の質の向上のためには、職場の同僚同士のチームワークを重視し、全員のレベルを向上させる視点と、個々の教師の（中略）向上を図っていく視点の両方を適切に組み合わせることが重要である」と提言されている。また、群馬県教育委員会から出された「平成29年度学校教育の指針」の解説では、生徒指導において、教職員間の温度差を取り除くこと、組織的・計画的に生徒指導を行うことが必要であると述べられ、教職員一人一人の指導力向上とともに、生徒指導に組織的に取り組むことが求められている。

平成29年度の中学校所属の長期研修員を対象として、生徒指導・教育相談に係る校内研修について調査したところ、生徒指導・教育相談をテーマにした校内研修を継続的に実施している学校は少ないということが分かった。しかし、実態調査から現場の教職員は、生徒や保護者への対応に困り感を抱えており、生徒や保護者へのより良い対応や、生徒指導・教育相談の課題について、どのように組織で対応したらよいかを知りたいと考えている。また、臨時的任用教職員は他の教職員と一緒に学ぶ機会が少なく、生徒指導・教育相談についての共通理解を図ることが難しいという現状から、生徒や保護者への対応に困る場面があることも分かった。これらのことから、教職員一人一人の指導力の向上とともに、生徒指導・教育相談の課題について組織的に対応することの大切さに気づき、実践に結び付く取組が必要であると考えた。

平成29年度の群馬県総合教育センター3年目経験者研修該当教員に、生徒指導・教育相談について行った調査では、「生徒への接し方や信頼関係づくり」「保護者との関係づくり」に課題を感じており、「職場の誰に、どのように相談したらよいか分からない」という実態も浮かび上がった。また、「教職員間で生徒への関わり方に差を感じる」「生徒指導の組織的な対応が分からない」という実態があることも分かった。今後、ベテラン教員の大量退職に伴い、若手教員の割合が増加することが予測されることから、現場における実践の中で、ベテラン教員から若手教員へ知識や技術を伝えることが困難になってくることが、課題の一つとして挙げられている。群馬県の教員の声からも、学校現場における若手教員の育成が急務であることが分かった。

教職員が、日常の生徒指導・教育相談の課題や生徒や保護者への対応について共通理解ができるように、生徒との関わりを支援する「サポートブック」を作成する。そして、教職員個人が日常における生徒との関わり場面や、校内研修の場面で「サポートブック」を活用できるようにする。また、教職員の組織で協働する意識を高めることを目指した「校内研修プログラム」を作成する。「校内研修プログラム」は、年度始めに組織全体の共通理解を図るための全体研修を実施する。その後、教職員個人の課題に応じた二つの課題別研修を設定し、研修を選択できるようにする。このように、年間を通して生徒指導・教育相談について教職員同士が学ぶことができるようにしたり、生徒指導・教育相談の課題に協働して取り組むための内容や方法を共通理解できるようにしたりする。こうした取組が、教職員個人の生徒指導・教育相談における資質の向上とともに、協働して生徒指導・教育相談の課題に取り組んでいこうとする意識の高まりにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

中学校教員に向けて、生徒とのより良い関わりを支援するための「サポートブック」を作成する。「サポートブック」を用いた「校内研修プログラム」を実施することが、組織で協働する意識の高まりにつながることを実践を通して明らかにする。

III 研究内容

1 基本的な考え方

(1) 「協働する意識を高める教職員」について

「生徒指導提要」(平成22年3月)では、「教員一人一人の努力を生徒指導の目標の達成につなげるには、学校全体の共通理解と取組が不可欠であり、そのためには、生徒指導が学校全体として組織的、計画的に行われていくことが必要である」と述べている。そこで、本研究においては、「生徒指導・教育相談の課題が生じたときに、職場の様々な立場の教職員に積極的に相談し、他の教職員との情報共有や、対応について共通理解を図るなど、一人で抱え込まず組織で課題に取り組もうとする教職員」と捉える。

(2) 「生徒とのより良い関わり」について

「生徒指導提要」(平成22年3月)では、「自己選択や自己決定の場や機会を与え、その過程において、教職員が適切に指導や援助を行うことによって、児童生徒を育てていくことにつながる」と述べている。そこで、本研究においては、「生徒と関わる際に、生徒の思いに寄り添い、その思いを大切にしながら、生徒が自己決定できる機会を与える関わり」と捉える。

(3) 研究構想図



2 教材の概要

(1) 「サポートブック」及び「校内研修プログラム」に係る実態調査の結果と考察

本研究においては、「ぐんま教職員ステージアップシステム」が示すライフステージに合わせて、基礎形成期に当たる初任から3年目経験者を「若手教員」、資質充実・発展期に当たる10年目経験者以降を「中堅教員」と捉える。実態調査では、中学校に勤務する若手教員、今後、中学校に勤務する可能性のある小学校の若手教員、異校種異動者研修該当教員が、生徒指導・教育相談に関してどのようなことに課題や不安を感じているのか、生徒指導・教育相談で悩んだときに相談しようとする意識を持っているかを明らかにする。また、ミドルリーダー研修該当教員や新任生徒指導主事研修の講師、長期研修員を対象として、生徒指導・教育相談の場面で、生徒と関わるときに留意していることについての調査を行う。これらを踏まえて、「サポートブック」と「校内研修プログラム」を作成する。

表1 質問紙調査、聞き取り調査の調査対象者及び調査計画

	調査対象	アンケート・聞き取り調査の主な内容	期日
若手教員	小学校3年目経験者研修該当者(130名)	生徒指導・教育相談において、課題や不安に思うことについて。	6月30日～ 7月24日
	中学校3年目経験者研修該当者(79名)		
	異校種異動者研修該当者(11名)		10月19日
中堅教員	ミドルリーダー研修該当者(120名)	生徒や保護者との関わりについて、工夫したり実践したりしていることについて。	8月4日
	長期研修員(24名)		
	新任生徒指導主事研修の講師(6名)	生徒指導主事として、他の教職員と協働するために工夫したり実践したりしていることについて。	8月10日
	所属校教職員(15名) 長期研修員(24名) 教育相談研究員(1名)	校内研修プログラムの検証。	8月～11月

① 「課題や不安を感じていること」について

生徒指導・教育相談の課題について、「生徒に関して」84%、「保護者に関して」43%、「教職員に関して」18%であった(図1)。記述内容を見ると、「生徒に関して」は「生徒にどのように接して良いか分からない」「信頼関係が築けるか不安」が最も多かった。次いで、不登校生徒の対応、生徒間のトラブルの対応、部活動の生徒への対応であった。「保護者に関して」は、保護者との関係づくりや保護者からのクレームに関すること、「教職員に関して」は、教職員間の連携や生徒指導の温度差に関するものが多かった。これらの結果から、若手教員は、生徒や保護者への関わりに課題を抱えていることが分かった。そこで、「サポートブック」や「校内研修プログラム」に、生徒や保護者への具体的な関わり方や、教職員間の連携の方法を取り入れることで、若手教員への課題解決の助言に生かす。

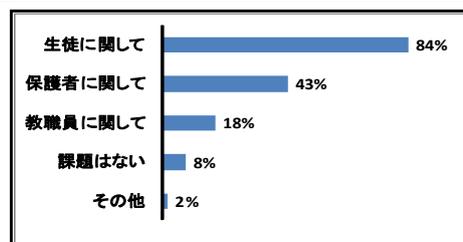


図1 生徒指導・教育相談の課題

② 「職場における相談」について

若手教員が職場の誰に相談するかについて、「学年の教員」が79%で最も多いことが分かった(図2)。「相談しない」という回答はなかったことから、生徒指導・教育相談で悩んだときに、職場の同僚に相談することは大切であることを理解し、実践していることが分かった。しかし、相談相手は、生徒指導主事・主任が37%、養護教

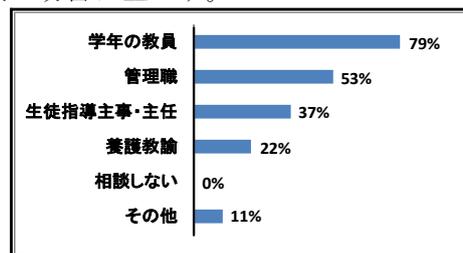


図2 誰に相談するかについて

諭が22%であることから、「サポートブック」や「校内研修プログラム」には、学年の教員だけでなく、職場の様々な立場の教職員に相談を広げることの有効性や、組織的な対応に関する具体的な方法についても取り入れていく。

③ 「児童生徒に関わるときの工夫」について

ミドルリーダー研修該当教員、新任生徒指導主事研修の講師に対し、生徒指導・教育相談の場面で児童生徒に関わるときの工夫について、自由記述による調査を行った。最も多かった内容は、「児童生徒の話をよく聴く」「児童生徒の気持ちを考えながら関わる」であった。この結果から、中堅教員は、傾聴・受容・共感を日頃から意識し、実践していることが分かった。その他に、「考えを引き出すようにする」「どうすれば良かったのか、これからどうすれば良いかを一緒に考える」といった内容から、児童生徒の自己決定を意識した関わりの工夫も見られた。また、対応する場所や対応する人数の工夫についての記述も得られた。これらの工夫や実践を、解決や対応のヒントとして、「サポートブック」や「校内研修プログラム」に取り入れる。なお、より日常で生かせるように具体的な対応等を提案する。

④ 「組織で対応するという視点での工夫」について

ミドルリーダー研修該当教員と新任生徒指導主事研修の講師に対し、生徒指導・教育相談において、組織で対応するという視点での日頃からの工夫について、自由記述による調査を行った。最も多かった内容は、職場の同僚（管理職含む）との情報共有であった。また、情報共有を基にして指導・支援の方向性や役割分担を決定したり、教職員間で共通理解を図ったりしながら対応することを日頃から意識し、実践していることが分かった。これらの工夫や実践を、情報共有の方法として、「サポートブック」や「校内研修プログラム」に取り入れることで、組織的な対応の方法の理解につなげていきたい。

(2) 指導支援資料「サポートブック」について

「サポートブック」とは、中学生の指導において、より良い生徒への関わり方を提案した教職員向けのハンドブックである。群馬県総合教育センター基幹研修等該当教員へのアンケート調査から明らかになった、生徒指導・教育相談における、生徒との関わり方の課題解決の参考となる助言や例示を盛り込む。この「サポートブック」が、中堅教員から若手教員に向けて、生徒との関わり方を伝える役割を果たせると考える。各項目では、課題や悩みに対して、具体的な対応例や対応のポイントを提案する（図3）。また、「校内研修プログラム」の中で活用し、研修内容を深めることや、On the Job Training（以下、OJTと表記する）の一環として、教職員への助言場面で活用することで、教職員の新たな気づきを促したい。



図3 「サポートブック」の構成

(3) 「校内研修プログラム」について

① 「校内研修プログラム」の内容と構成

「校内研修プログラム」は、生徒指導・教育相談について年間を通して学べるよう、「共通理解編」「日常編」「組織編」で構成する。研修時間は1時間とし、ロールプレイやグループワーク等を取り入れた演習を用い、中堅教員と若手教員との相互成長や、教職員一人一人の多様な気付きを促すものにしていく。また、すぐに研修を行えるように、せりふが入り、クリックのタイミングが示された資料を用意した(図4)。「共通理解編」は、全教職員を対象にした内容とし、生徒や保護者とのより良い関わりのポイントを理解したり、「いじめ防止基本方針」を確認したりすることで生徒指導・教育相談についての共通理解を図るものにしていく。「日常編」は、若手教員を対象にした内容とし、演習を通して、生徒とのより良い関わりについての理解を深められるものにしていく。「組織編」は、中堅教員を対象にした内容とし、ケース会議の進め方など、組織的な対応について教職員同士の共通理解を図るものにしていく。

「校内研修プログラム」は、生徒指導・教育相談に関する学校の方針について教職員同士の共通理解を図るために、1学期に「共通理解編」の研修を全教職員を対象に実施し、2学期以降に、教職員個人の課題に応じて「日常編」と「組織編」の研修を選択できるように構成した。

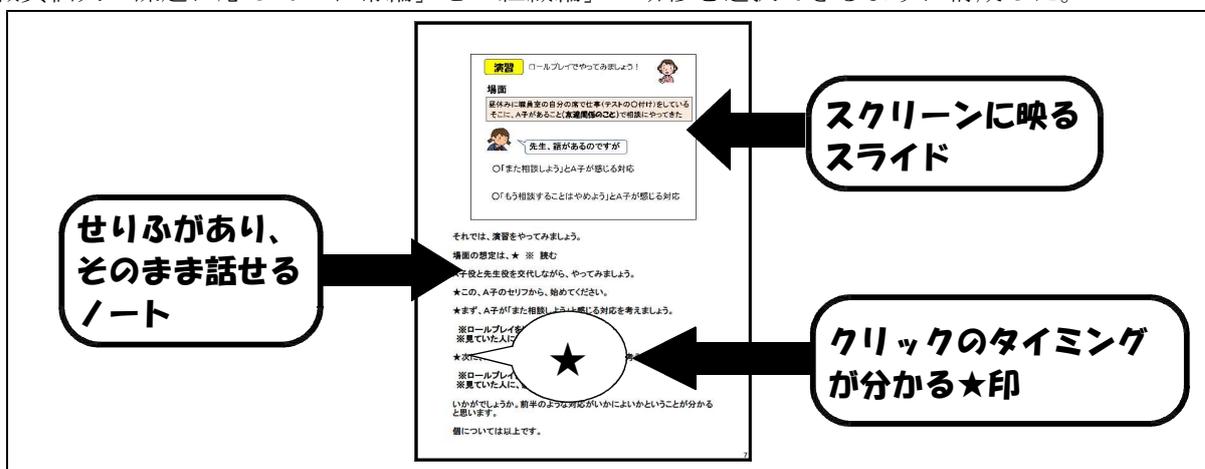


図4 校内研修の資料

② 「サポートブック」と「校内研修プログラム」との関連

「校内研修プログラム」で活用する「サポートブック」の項目は以下のとおりである(表2)。

表2 「校内研修プログラム」に関する「サポートブック」の項目

サポートブック					校内研修プログラムでの活用		
章	項	目	概要	ページ	共通理解編	日常編	組織編
第I章 基本編	1 生徒との関わり	中学生(思春期)の特徴	思春期の心の発達の特徴	1		○	
		対話を大切にしたい対応	対応の具体例	2	○	○	
		援助的な関わりを大切にしたい対応	援助的な関わりを理解	5	○	○	
		生徒との信頼関係を築くために	日頃の取組	8		○	
2 保護者との関わり	保護者をつなぐために	相談や面談の基本	相談や面談の基本	9	○		
		電話での対応で気を付けたいこと	電話対応の基本	10	○	○	
		12	○	○			
3 教職員間での関わり	教職員間の連携のために	連携のための心掛け	13			○	
4 その他	部活動での生徒との関わり	居心地の良い学級づくり	日頃の取組と関わり方	15		○	
		18		○			
		生徒間のトラブルへの対応	対応の確認	19		○	
第II章	1 いじめ問題への対応	いじめ問題への組織的対応	組織と対応の確認	20	○		○
		いじめ問題の未然防止に向けて	未然防止への取組	22		○	
	2 不登校問題への対応	不登校問題への組織的対応	組織と対応の確認	23	○		○

対 応 編	-----	不登校問題の未然防止に向けて	未然防止への取組	24		○	
	3 みんなで考えましょう	ケース会議	ケース会議のポイント	25	○		○
		事例研究	事例研究の方法	26			○

IV 研究の計画と方法

1 実践の概要

(1) 「校内研修プログラム」の実践について

① 校内研修「共通理解編」

対 象	実施時期	概 要	サポートブック
平成29年度長期研修員	平成29年 8月23日(水)	<ul style="list-style-type: none"> 生徒や保護者とのより良い関わりを目指した対応を、事例を基に考え全体で交流する。 いじめ問題の対応について、「いじめ防止対策推進法」や「学校いじめ防止基本方針」に触れ、共通理解を図る。 	p2～7
所属校教職員	平成29年 8月30日(水)		p9～12 p20、23 p25

② 校内研修「日常編」

対 象	時 期	概 要	サポートブック
平成29年度長期研修員	平成29年10月 4日(水)	<ul style="list-style-type: none"> 思春期の生徒へのより良い関わりを目指した対応を、日常の生徒との対話を中心に、事例を基に考え全体で交流する。 	p1～8
所属校教職員	平成29年10月13日(金)		p10～12 p15～19 p22、24

③ 校内研修「組織編」

対 象	時 期	概 要	サポートブック
平成29年度長期研修員	平成29年11月14日(火)	<ul style="list-style-type: none"> 情報共有の大切さや、情報の活用の仕方について、共通理解を図る。 ケース会議を行い、組織を生かして対応することのよさについて意見を交流する。 	p13、14
所属校教職員	平成29年11月20日(月)		p20、23 p25、26

(2) 教員への助言について

① 若手教員に向けて

所属校でのOJTにおいて、配慮を要する生徒への対応を中心に「サポートブック」を用いた助言を行い、新たな気づきを促す。また、生徒指導全般に関わる不安や悩みに対して、対応策等の助言を行う。

② 生徒指導主事に向けて

ケース会議の進め方等、協働の仕方について、「サポートブック」を用いて助言を行う。

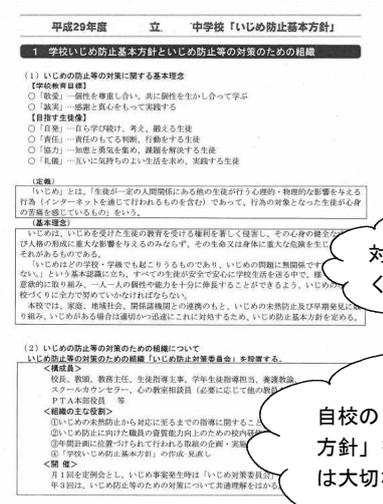
2 検証計画

検証の視点	方 法
「サポートブック」の内容は、教職員個人が生徒とのより良い関わりを工夫する上で役立ったか。また「校内研修プログラム」の内容の理解を深めることができたか。	<ul style="list-style-type: none"> 研修後のアンケート調査 個別の聞き取り調査
「校内研修プログラム」の内容は、教職員が生徒とのより良い関わりや組織で協働していこうとする意識を高める上で有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> 研修の様子とシートの記述 研修後のアンケート調査
年間を通して研修できる「校内研修プログラム」を作成したことは、教職員が生徒とのより良い関わりを協働して目指そうとする意識を高める上で有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> 研修後のアンケート調査 個別の聞き取り調査

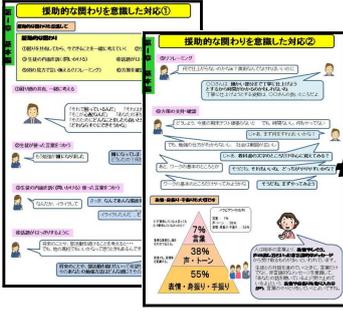
3 実践

(1) 「校内研修プログラム」の実践

① 校内研修プログラム「共通理解編」の実践

研修内容	時間	研修の様子他
<p>1 ねらいの確認</p>	2	<p>生徒や保護者への関わりや居心地の良い学級づくりについて考えていきましょう。</p> 
<p>2 生徒とのより良い関わりの理解 ◎ロールプレイ <信頼関係を深める対応を考える> ・信頼関係を深める対応 ・信頼関係を深められない対応</p> <p>信頼関係を深める対応で大切なことは、傾聴・受容・共感です。サポートブックの2~4ページを見てみましょう。</p>	17	 <p>体の向きを変えて話をすることは、とても感じがいいと思う。</p> <p>生徒のことを思っていることが伝わる。</p>
<p>3 居心地の良い学級づくりの理解</p> <p>個と集団を育てる取組で学級経営を充実させることが、不登校・いじめの防止につながります。</p>	3	 <p>対応についてよく理解できた。</p> <p>自校の「いじめ防止基本方針」を知っておくことは大切なことだ。</p>  
<p>4 いじめ等の問題への組織対応についての理解 ・自校の「学校いじめ防止基本方針」の確認</p> <p>ケース会議については「組織編」で取り上げます。サポートブック25ページを見てください。</p>	15	<p>対応についてよく理解できた。</p> <p>自校の「いじめ防止基本方針」を知っておくことは大切なことだ。</p>  
<p>5 保護者とのより良い関わりの理解 ◎ロールプレイ <電話での保護者への対応を考える場面> ・傾聴・受容・共感を意識した対応 ・保護者が安心する終わり方</p> <p>サポートブック9ページを見てください。ほかにこのようなことを心掛けておくと良いですね。</p>	20	<p>寄り添っていることが伝わる対応だな。</p> <p>電話の最後に保護者の気持ちに寄り添った言葉を使うことが難しいので、参考にしよう。</p> <p>保護者が安心できる対応だと思う。</p> 
<p>6 研修のまとめ</p> <p>・基本的な対応を学んだり、ほかの先生の参考になるものを吸収できて良かった</p> <p>・研修の場を設定することで、日頃の生徒への対応について振り返ることができた。 ・どの場面も頻繁に起こりうるものなので、実用的だと思う。</p>	3	 

② 校内研修プログラム「日常編」の実践

研修内容	時間	研修の様子他
<p>1 ねらいの確認</p>	2	<p>生徒との信頼関係を築くために、より良い対応を考えていきましょう。</p> 
<p>2 中学生の発達段階の特徴の理解</p> <p>より良い関わりのために、発達段階の特徴を知っておくといいですね。サポートブック1ページを見てください。</p>	5	<p>言葉に出していることが気持ちの全部ではないんだ。</p> <p>言葉と反対の気持ちのこともあるんだ。中学生って、本当に難しい。</p> <p>対応するときには、表情や声の感じにも気を付けるようにしましょう。</p>  
<p>3 関わり方のポイントの理解</p> <p><より良い関わりを目指した対話></p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾聴・受容・共感を意識して ・身振り、手振りを意識して <p>ポイントは傾聴・受容・共感です。サポートブック2～4ページを見てください。</p> <p>○援助的な関わりについて</p> <p>サポートブック5～6ページを見てください。援助的な関わりも意識しましょう。</p>	20	<p>実際に言葉を考えてみると難しい。</p> <p>共感が難しいけれど、意識して対応するようにしよう。</p>   <p>サポートブック 5・6ページ</p>
<p>4 より良い関わりを目指した対応</p> <p>◎ロールプレイ</p> <p><提出物が滞っている生徒への対応場面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾聴・受容・共感を意識して ・自己決定を促すことを意識して <p><集団の中での個人への指導場面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の発達段階を考慮して ・毅然とした指導を意識して ・受容を意識して 	30	<p>なぜ、ボタンを留めていないのかな？きちんとした服装で練習をしよう。</p> <p>学年全体で合唱練習をしている中で、制服の第1ボタンを外して練習に参加している男子生徒への指導場面</p> <ol style="list-style-type: none"> ①個人で対応を考える。 ②ペアで意見交流をする。 ③ロールプレイで発表し、全体で共有する。 <p>他の人の対応を見ることは、勉強になる。もっと演習をやりたい！</p> 
<p>5 研修のまとめ</p>	3	<p>・先輩の先生から、いろいろな対応を学ぶことができた。</p> <p>・担任や教科担当の先生の対応を見ることができて参考になった。</p> <p>・日常の自分自身の生徒への対応についての振り返りになった。</p> <p>・日頃の指導の反省につながり、提案された対応の仕方は納得できた。</p>  

③ 校内研修プログラム「組織編」の実践

研修内容	時間	研修の様子他											
1 ねらいの確認	2	<p>組織を生かした生徒とのより良い関わり方について考えていきましょう。</p> 											
<p>2 組織対応と職員間の連携についての理解</p> <p>連携するためには、日頃から次のようなことを心掛けておくと良いですね。サポートブックの14ページを見てください。</p>	16	<p>たくさんの先生方に相談できるように、日頃から関係づくりをしておくように心掛けよう。</p> <p>サポートブック 14ページ</p> 											
<p>3 情報の活用についての理解</p> <p>○ケース会議について</p> <p>情報を活用した取組として「ケース会議」があります。サポートブックの25ページを見てください。</p>	10	<p>いつも情報共有だけで終わってしまっているけれど、具体的な対応や役割分担まで決めることが大切なことなんだ。</p> 											
<p>4 ケース会議についての理解</p> <p>◎ケース会議を体験する</p>	30												
	<p>模擬ケース会議 ワークシート(月 日) 年 組 氏名 参加者</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="526 1176 1085 1220">① 情報の収集</th> <th data-bbox="1085 1176 1380 1220">② 問題の背景(仮説)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="526 1220 1085 1422"> <p>【担任】 男4 子(男) A男 不明な理由で 「お母さん」に相談している 男3 子(男) A男 不明な理由で 「お母さん」に相談している</p> <p>【顧問】 1年 男子 男子 1年 男子 男子</p> <p>【議題】 1年 トラブル 特に親しい</p> </td> <td data-bbox="1085 1220 1380 1422"> <p>② 問題の背景(仮説) ・ 1年 男子 男子 ・ 1年 男子 男子 ・ 1年 男子 男子</p> </td> </tr> <tr> <th data-bbox="526 1422 901 1467">③ 課題の取り組</th> <th data-bbox="901 1422 1380 1467">④ 対応</th> </tr> <tr> <td data-bbox="526 1467 901 1512">A男以外の男子男子からの情報がない</td> <td data-bbox="901 1467 1380 1512">2 B男や他の子に 他の学年や 7年の生徒に話を聞く</td> </tr> <tr> <td data-bbox="526 1512 901 1556">他の先生への情報提供ができていない</td> <td data-bbox="901 1512 1380 1556">1 周知徹底</td> </tr> <tr> <td data-bbox="526 1556 901 1601">家庭への連絡が不足</td> <td data-bbox="901 1556 1380 1601">3 担任等が家庭訪問 or 来校 把握したことを伝える 指導の方向性</td> </tr> </tbody> </table> <p>◆次回の予定: 月 日() 場所 参加者 時 分 ~</p>	① 情報の収集	② 問題の背景(仮説)	<p>【担任】 男4 子(男) A男 不明な理由で 「お母さん」に相談している 男3 子(男) A男 不明な理由で 「お母さん」に相談している</p> <p>【顧問】 1年 男子 男子 1年 男子 男子</p> <p>【議題】 1年 トラブル 特に親しい</p>	<p>② 問題の背景(仮説) ・ 1年 男子 男子 ・ 1年 男子 男子 ・ 1年 男子 男子</p>	③ 課題の取り組	④ 対応	A男以外の男子男子からの情報がない	2 B男や他の子に 他の学年や 7年の生徒に話を聞く	他の先生への情報提供ができていない	1 周知徹底	家庭への連絡が不足	3 担任等が家庭訪問 or 来校 把握したことを伝える 指導の方向性
① 情報の収集	② 問題の背景(仮説)												
<p>【担任】 男4 子(男) A男 不明な理由で 「お母さん」に相談している 男3 子(男) A男 不明な理由で 「お母さん」に相談している</p> <p>【顧問】 1年 男子 男子 1年 男子 男子</p> <p>【議題】 1年 トラブル 特に親しい</p>	<p>② 問題の背景(仮説) ・ 1年 男子 男子 ・ 1年 男子 男子 ・ 1年 男子 男子</p>												
③ 課題の取り組	④ 対応												
A男以外の男子男子からの情報がない	2 B男や他の子に 他の学年や 7年の生徒に話を聞く												
他の先生への情報提供ができていない	1 周知徹底												
家庭への連絡が不足	3 担任等が家庭訪問 or 来校 把握したことを伝える 指導の方向性												
<p>5 研修のまとめ</p>	2	<p>このような研修をする機会が少ないので、とても勉強になった。</p> <p>困ったら、先輩の先生方にどんどん相談するようにしよう。</p> <p>日頃から先生方が話し合える環境をつくるのが大切であると改めて感じた。</p> <p>私たちが、「進んで話し合える」「相談できる」環境をつくるようにしていこう。</p>  											

(2) 教員への助言について

① 若手教員に向けて

4月に実施したC&Sの結果を基に、今後の学級経営について話し合った。C&Sの結果から、学級の雰囲気や自己肯定感に差があり、学級としてのまとまりにやや欠けていることが分かった。そこで、配慮を要する生徒と学級全体への対応についてOJTの場面を利用して助言を行った。

ア 配慮を要する生徒への対応についての助言

自己肯定感の低い生徒に対し、チャンス相談等を利用した、個別の声掛けを行っていくことを助言した。その時に、「傾聴・受容・共感」を心掛けるとよいことを、「サポートブック」を用いて説明した。若手教員は、「生徒の話をじっくり聴くことができていないので、時間を取り話を聴くようにしたいと思います」と話した。

7月に、前回のOJTで助言した、個別の声掛けが必要な生徒へのその後の対応について尋ねた。すると、話をするきっかけを意図的につくって、なるべく会話をすることを心掛けているとのことだった。とても良い取組であることを伝えると、「生活ノートや個人調査票などから話題を見付け、そこから話すきっかけをつくっています」という言葉が返ってきた。いろいろな方法で生徒理解に努めていることがうかがえた。

2学期に入り、生徒の様子について尋ねたところ、特に大きな変化はないとのことだった。その中で、「どの程度のことまでを、保護者に連絡をすればよいの分からないのですが」と相談を受けた。そこで、「サポートブック」を用いて、保護者との信頼関係を深めるために心掛けるとよいことについて説明し、少しでも気になることがあれば連絡をするほうがよいことを助言した。「気になることがあったら、まめに連絡をしようと思います」という言葉が返ってきた。

イ クラス全体の生徒への対応についての助言

C&Sの結果を受けて、目指す学級像について話し合いを行ったところ、「自分たちで決めたことに責任を持って取り組めるクラス、自己決定できるクラスを目指したい」とのことだった。それに向けてどんなことができるかを話し合ったところ、行事への取組を通して実践したいとのことだった。そこで、「援助的な関わり」について、「サポートブック」を用いて説明した。若手教員は、「生徒同士の話し合いが滞った時に、援助的な関わりを意識して関わってみようと思います」と話した。

9月の運動会終了後に、運動会に向けてのクラスの取組の様子について尋ねたところ、「自分たちから進んで練習しようという生徒が少なく、直前になっても人任せの生徒がいた」とのことだった。そこで、11月に行われる合唱コンクールに向けて、クラスの目標を決めるときに時間を十分取って話し合いをし、目標を決めるまでの過程（自分たちで考え目標を決める）を大切にしてみてもどうかと助言した。すると、「運動会へ向けては、忙しかったこともあるが、話し合いの時間を十分に取らずに目標を決めてしまったので、今度はしっかり話し合いの時間を取りたいと思います」「その際に、自分たちの力で目標を決められるような関わりを心掛けたいと思います」という言葉が返ってきた。

合唱コンクールの2週間前に、生徒の様子について尋ねたところ、「合唱コンクールに向けて練習をしているが、生徒の意欲が感じられない。どうしたらよいか」とのことだった。そこで、クラスで話し合って決めた目標や目的について、確認してはどうかと助言した。若手教員は、「月曜日の朝の会で話をしてみます」と返した。

合唱コンクール直前に、前回相談を受けた合唱コンクールに向けた、生徒の取組について尋ねたところ、「目標や目的について投げ掛けたことで、その後の練習の雰囲気が少し変わったように感じた」とのことだった。若手教員から、「いつもは自分がいろいろ話してしまうが、今回は投げ掛けるだけにしてみました」という言葉が返ってきたことから、生徒が主体的に考えるような関わりを意識していることが感じられた。

② 生徒指導主事に向けて

1学期の終わりに、「教職員で協働するには、どのようにしたらよいですか」と相談を受けた。そこで、ケース会議について、「サポートブック」を用いて説明した。簡単な事例を基にケース会

議を体験してもらったところ、「ケース会議の進め方がよく分かりました」という言葉が返ってきた。そこで、「校内研修プログラム」「組織編」でケース会議の演習があることを伝え、「組織編」を実施してもらうことにした。

11月に教職員の協働の様子について尋ねたところ、「校内研修プログラム」「組織編」を実施後、シートを使ってケース会議を実施しているとのことだった。また、「シートを保存して、対応策や対応の経過を教職員で共有できるようにしています」という言葉が返ってきた。生徒指導主事として、自信を持って組織的な対応を意識した取組ができている様子うかがえた。

V 研究の結果と考察

1 「サポートブック」の内容の有効性について

長期研修員と所属校教職員へのアンケート調査では、「生徒や保護者と関わる上で役立つと思いますか」「研修内容の深まりにつながると感じますか」の二つの質問項目で、88%が「思う」と回答した。これは、群馬県総合教育センターで研修を受けた教員へのアンケート調査を基に、学校生活の中でよくある場面を取り上げ、対応例を具体的に記載し、日常でも活用できるように工夫したことで、実践につながりやすいものになったことが理由であると考えられる。また、吹き出しやイラスト等を用いて、文字での情報量をなるべく少なくしたことで、限られた研修時間の中で活用しやすくなり、研修内容を深めることにつながったためと考えられる。

- ・ 臨時的任用教職員にとって、このような資料があることで共通理解が図れ、組織的な取組につながる。
- ・ サポートブックを用いて研修することで学校の生徒指導の指針に使い、組織的な取組につながる。
- ・ サポートブックがあることで、研修後も学んだことの確認ができる。

図5 アンケート調査の記述

アンケート調査の記述から、「サポートブック」が生徒指導・教育相談に関する教職員間の共通理解や、組織的な対応にも役立つものであることが分かった（図5）。また、若手教員からは、「生徒と関わる時に、『サポートブック』にある対応の仕方を参考にして話してみようと思う」や「保護者への電話での対応のときに、『サポートブック』にある、電話の対応例を参考してみようと思う」という声が聞かれたことから、「サポートブック」が日常の生徒や保護者への対応場面で活用できると考えられる。

2 「校内研修プログラム」の内容の有効性について

若手教員への生徒指導・教育相談に関する課題についての調査の結果を基に、「共通理解編」「日常編」「組織編」の三つの内容の研修を計画し、実施した。校内研修プログラムの内容の有効性について、長期研修員、所属校教職員へのアンケート調査の結果を基にまとめる。

「共通理解編」の研修について、「研修内容は、年度の始めに行う内容に適していると思いますか」「研修内容は生徒や保護者と関わる上で、今後生かせると思いますか」の二つの質問項目で、88%が「思う」と回答した。研修中に、「いじめ問題への組織対応について理解できた」「保護者の気持ちに寄り添った言葉を意識して対応しようと思う」などの声が聞かれた。また、ほかの教職員のロールプレイを見て、「なるほど、参考になる」「あの対応なら保護者も安心する」など気付くことができた。これらのことから、生徒や保護者への関わりや組織的な対応について、共通理解を深めている様子うかがえた。このように、「共通理解編」の研修内容は、生徒や保護者へのより良い関わりについて、教職員個人の理解を深めることや、教職員同士の共通理解を図ることに有効であったと考えられる。

「日常編」の研修について、「研修内容は、生徒と関わる上で今後生かせると思いますか」「研修内容は生徒への対応について役立つと思いますか」の二つの質問項目で、93%の参加者が「思う」と回答した。また、「中学生の発達段階の特徴についての理解が深まりましたか」の質問項目で、93%

の参加者が「深まった」と回答した。研修前の調査で、中学生の発達段階の特徴を「あまり理解していない」と回答した1名の教職員も、研修後は「少し深まった」と回答が変容していることから、発達段階の特徴について理解の一助になったと考える。アンケート調査の記述から、「日頃の生徒への対応の振り返りにつながった」「今後に生かしたい」という記述を得た。研修中の様子から、「傾聴や受容することはできるが、共感することが難しいと感じる。これからは、生徒に対応する時に共感することを特に意識していきたい」という気付きが見られた。また、ロールプレイを見て、「集団の中での個人への指導は、配慮が必要であり、対応の難しさを改めて感じた」という声が聞かれたことから、これまで何気なく指導していたことについても、生徒への対応の仕方について気を付けようというように、参加した教職員の意識が変化したことが分かる。このように、「日常編」の研修内容は、生徒へのより良い関わりについて、教職員個人の理解を深めることにつながった。また、ロールプレイなどの演習を通して、より良い関わりを考えたことは、生徒指導・教育相談に協働して取り組んでいこうとする意識を高めることに有効であったと考える。

「組織編」の研修について、「生徒指導・教育相談に組織的に取り組もうと思いましたが」「組織的な取組の必要性について理解できましたか」の二つの質問項目で、93%の参加者が「思う」「理解できた」と回答した。研修中の様子から、ケース会議の演習では、「具体的な対応策や担当をはっきり決めることは、担任として安心する」「こうして、みんなで考えることでより良い対応が考えられる」という気付きが見られた。また、アンケート調査の記述から、「ケース会議を演習したことで、組織で対応する大切さを意識できた」「組織的な対応についての研修は毎年必要だと思う」「ケース会議を行うときに、関係する教職員がいることが大切だと思った」「様々な課題に組織で対応できるよう、日頃から相談しやすい環境をつくっていききたい」という気付きが見られた。このように、「組織編」の研修は、教職員が組織的に対応することの意義や、日頃から相談しやすい職員室の環境をつくっていくことが大切であることに気付き、組織的に対応することのよさを感じることに有効であったと考える。

以上の結果から、実態調査を生かした三つの研修は、教職員が生徒や保護者とのより良い関わりを理解を深め、組織的に対応することのよさに気付き、生徒指導・教育相談に協働して取り組んでいこうとする意識を高めることに有効であったと考える。

3 「校内研修プログラム」の構成に関わる有効性について

「3回の研修を実施したことで、生徒指導・教育相談に組織で取り組んでいこうとする意識を高めることにつながりましたか」の質問項目で、95%の参加者が「つながった」と回答し、「このような研修会があったら参加したいと思いますか」の質問項目で、93%の参加者が「思う」と回答した。

「校内研修プログラム」実践後のアンケート調査の記述では、「組織的な取組が大切であり、必要なことだと感じた」「先生方が話し合える環境を作ることも重要だと思った」という意見が書かれていた。このことから、教職員が生徒指導・教育相談に係る研修を年間を通して計画的に実施することが、教職員個人の資質や協働意識の高まりにつながったと考える。

また、「全体研修一つ、選択できる研修二つという研修を組み、年間を通して研修できるように計画したことについてどう思いますか」の質問項目で、90%の参加者が「非常に良い」と回答した。また、「良い」と回答した中堅教員のアンケート調査の記述では、「若手教員の良いところを学べるので、私は全部の研修に参加したい」という意見が書かれていた。若手教員にとっても、中堅教員にとっても、三つの研修「共通理解編」「日常編」「組織編」が、生徒や保護者とのより良い関わりへの理解や、教職員の協働の意識を高めることに有効であったと考える。また、「全体研修の後、個人の必要感に応じて研修を選択できることで、前向きな気持ちで研修できる」という声も聞かれ、研修を選択できる有効性が確認できた。また、「異動してきた教員は不安な気持ちを抱えていると思うので、このような研修を年間を通して実施し、生徒指導・教育相談に取り組むことはよいと思う」という意見も得られた。

これらのことから、先生方のニーズに合った研修を、全体研修と選択できる研修という構成で計画

し実施したことは、生徒指導・教育相談における、教職員個人と組織の資質向上につながったと考える。そして、生徒指導・教育相談に係る校内研修を計画的に実施することは、若手教員が中堅教員の指導技術を学ぶ機会が増えることにもつながり、若手教員と中堅教員の相互成長にもつながると考える。

「校内研修プログラム」実践後の、「生徒との対話のときに、特に共感することを大切にしています」といった声や、生徒指導主事からの、「ケース会議のシートを活用し、学年会でミニケース会議を開いて対応を考えるようになりました」という声から、教職員の生徒指導・教育相談に協働して取り組んでいこうとする意識の高まりが感じられるとともに、組織的な取組が実践されていることが分かった。

以上のように、教職員全体で生徒指導・教育相談に係る研修を年間を通して計画的に実施していくことで、教職員の生徒や保護者への対応等についての理解や、教職員同士の共通理解が深まり、生徒へのより良い関わりに向けて、協働する意識を高めることができたと考える。

VI 研究のまとめ

1 成果

- 「校内研修プログラム」を、実態調査から得た課題に基づき作成し、「サポートブック」を活用し実践したことは、教職員個人の理解を深めることや、組織で協働していこうとする意識を高めることにつながった。
- 「サポートブック」を、実態調査から得た課題に基づき作成したことで、教職員が生徒や保護者へのより良い関わりの工夫に役立つ内容にすることができた。また、研修の中で活用することで、「校内研修プログラム」の内容の理解を深めることができた。
- 「校内研修プログラム」を、年間を通して研修できるように構成し、実践したことで、生徒とのより良い関わりを協働して目指す意識が高まり、組織で協力して課題に取り組む教職員集団になった。

2 課題

- 「サポートブック」について、今後も教職員との関わりを通して得た声を生かし、事例を増やすなど、教職員が日常の指導で困ったときにすぐに活用できるよう、内容の改善・充実を図っていく必要がある。
- 「校内研修プログラム」について、選択できる研修を増やすなど、より教職員のニーズに合ったものにしていく必要がある。

VII 提言

- 生徒指導・教育相談の課題に、組織で協働して取り組もうとする意識を高めるためには、自校の実態を把握し、生徒指導・教育相談に係る研修を年間を通して計画的、継続的に実施していくことが必要である。このような、生徒指導・教育相談について、教職員同士が学び合う環境を整えることで、生徒や保護者へのより良い関わりや、教職員としての資質向上につながると考える。

<参考文献>

- ・『生徒指導提要』(2010) 文部科学省
- ・神奈川県総合教育センター 『生徒の自己理解を促す共感的な対話』(2012)
- ・群馬県教育委員会 『不登校対策資料 ―不登校問題に対する学校の取組の充実―』(2017)
- ・神谷 和宏 著 『教師のほめ方叱り方コーチング』 学陽書房(2007)

<担当指導主事>

西田 麻規 柴山 和宏